

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第18号

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代

鹿児島県内における中世のトイレ遺構
—科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡

令和6年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2025. 10

『縄文の森から』第 18 号 目 次

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・・・ 1

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代・・・・・・・・ 39

鹿児島県内における中世のトイレ遺構 —科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人・・・・・・・・ 45

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡・・・・・・・・ 57

令和 6 年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡

The emergence and materials for flint in Satsuma and Osumi

Fujiki Satoshi

要旨

本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告する。大島遺跡の火打石は、薩摩・大隅地域における現状で最古の火打石である。また、薩摩・大隅地域の火打石石材は、石英・鉄石英・玉髄・碧玉・チャート・その他の珪質石材等があり、古代から近世に至るまで石英が用いられたこと、薩摩地域では中世に鉄石英の利用が、近世以降には玉髄の利用がそれぞれ加わっていた。

キーワード 火打石、火打金、石英、鉄石英、玉髄

1 はじめに

人と火の歴史を知るうえでは、火起こしの道具とその技術等を明らかにすることが重要である。そこで、本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告するものである（註1）。報告資料は、①発掘調査報告書未掲載品の中から見出された大島遺跡の3点・犬ヶ原遺跡の1点・鍛冶屋馬場遺跡の1点・柗城跡の5点・上野城跡の1点、合計5遺跡11点の火打石および火打石の欠片、②発掘調査報告書へ別器種で掲載されていたものの今回の調査で火打石であるとわかった小倉畑遺跡の1点・山口遺跡の2点、合計2遺跡3点の火打石、①②合わせて7遺跡14点の火打石および火打石の欠片である。

2 関係する調査・研究史

薩摩・大隅地域においては、火打石やその可能性があると考えた石器の報告例が増加している。鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵分では、小倉畑遺跡・チシャノ木遺跡・上水流遺跡・向井原遺跡・柗城跡・二渡船渡ノ上遺跡・虎居城跡・山口遺跡・大願寺跡・安良遺跡・新城跡・諏訪ノ前遺跡・北山遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002a・2008・2009a・2010a・2010d・2011a・2011b・2013・2024、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020・2025a・2025b・2025c）、市町村教育委員会や大学による発掘調査では、牧遺跡（有明町教育委員会2005）、志布志城跡・上苑A遺跡（志布志市教育委員会2018・2021）、高城跡（垂水市教育委員会2018）、鹿児島大学構内遺跡（鹿児島大学埋蔵文化財調査室2010、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター2015・2020・2025）が挙げられる（註2）。

これら火打石等の掲載された発掘調査報告書が2000年代以降の発行で占められることからわかるとおり、薩摩・大隅地域における遺跡出土火打石の調査・研究等の歴史は

この20年ほどと新しい。そのような中、宮田栄二氏が、先史時代の石器石材と火打石との関係や鹿児島県域の火打石産地に関していち早く言及している（宮田2003）。これは、薩摩・大隅地域の遺跡出土火打石をめぐる調査・研究史における画期であるとともに、火打石への考古学的関心が高いとは言えなかった当時の九州地方の考古学にあっても先駆的な内容であった。

この前後、筆者は、宮田氏の言及や火打石研究会のWebサイト等にヒントを得ながら火打石・火打金の出土例を検索し、九州各地の遺跡から出土した火打金16点、火打石については未図化資料を合わせて20点に満たないながら集成した（藤木2004）。同集成で薩摩・大隅地域の遺跡出土火打石として取り上げた隼人町（現霧島市）の弥勒院遺跡の18世紀後半～19世紀前半と推定される遺構出土品については、調査担当の重久淳一氏からのご教示であった。また、藤木2004を受け、渡辺芳郎氏から、有明町（現志布志市）内の遺跡で火打石の出土例があること、「三国名勝図会」に火打石産地等の情報掲載があることをご教示いただいた。

その後、上床真氏により大隅・薩摩、奄美地域の火打石が集成され、火打石については弥勒院遺跡・柗城跡・小倉畑遺跡・虎居城跡で出土していると紹介された（上床2009）。また、後世の火打石が先史時代の石核等と誤認されている例が日本各地にあるが、油免・本寺遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010b）で縄文時代の石核と報告された資料について、古代以降の火打石であると再評価された（藤木2011）。

なお、火打金については、大隅・薩摩、奄美地域の古代以降の鉄製品集成の中で取り上げられ（川口2008）、次いで上床氏により火打石とともに集成がなされた（上床2009）。そして、最新では、大隅地域において桑幡氏館跡・安良遺跡・横川城跡の4点、薩摩地域において大島遺跡・

上野城跡・持鉢松遺跡・上水流遺跡・虎居城跡・上ノ平遺跡・中之城跡・芝原遺跡の12点、奄美地域において屋鈍遺跡の1点の火打金が知られ、8～9世紀代と推定された大島遺跡例を最古として、古代から近世までのおおよその変遷があきらかとなるとともに、考古資料の限定的な奄美地域の民俗資料が紹介されている（藤木 2019・2025、藤木・大堀・山崎 2025）。

3 新資料の報告

新資料が確認された遺跡の概要は各発掘調査報告書を参照いただくとし、ここでは、あらたに見つかった火打石等を解説していく。

（1）大島遺跡の火打石

大島遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2005）では、石英製火打石3点が出土した（第1・3図1～3）。第1・3図1は、結晶質で透光性のあるやや黄味がかかった良質の石質である。稜線の潰れはきわめて顕著で、丸みを帯びている。3.9×2.4×1.7 cm・19.2g。第1・3図2は、透光性のないやや黄味帯びた白色の石質（珪質岩に近い）である。礫面の残り具合から、円磨された礫が打ち割られて火打石とされたとわかる。稜線の潰れは部分的である。火打金と打ち付けて使用された際に擦りついた鉄分が、火打石の稜線上ほか器面に錆びた状態で付着する。4.6×3.4×2.5 cm・35.8g。第1・3図3は、透光性のないやや桃色がかかった白色の石質である。稜線の潰れは顕著で、鉄錆が付着する。2.7×2.8×2.4 cm・20.0g。発掘調査報告書によると、Ⅱb層が中世から近世、Ⅲ層が古代（8～9世紀代か）、Ⅳ層が弥生時代の包含層であり、火打石3点はいずれもⅢ層から出土したことから、8～9世紀代のものであろう。なお、大島遺跡では、火打石と同じⅢ層中から火打金1点（原報告第175図1177）も出土している。

（2）犬ヶ原遺跡の火打石

犬ヶ原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）では、D-2区Ⅱb層から石英製火打石1点が出土した（第1・3図4）。石英は、透光性のある白色良質で、下面には六角柱の結晶体の頭が多数並ぶものである。稜線の潰れが顕著で、鉄錆が付着する。3.4×2.8×2.5 cm・28.1g。Ⅱb層からは10世紀前半の遺物が多く出土しており、火打石も同時期のものであろう。

（3）鍛冶屋馬場遺跡の火打石

鍛冶屋馬場遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002b）では、C-9区Ⅳb層から石英製火打石1点が出土した（第1・3図5）。石英は、透光性のない白色でやや粗質のものである。稜線の潰れが顕著で、鉄錆が付着する。2.8×2.6×2.3 cm・15.0g。Ⅲa・Ⅲb層が近世、Ⅳa層が中世後半から近世、Ⅳb・Ⅴb層が古代（10世紀中頃）、Ⅵ層が弥生～古墳時代等の包含層であるとされ、火打石も10世

紀中頃ののものであろう。

（4）梅城跡の火打石

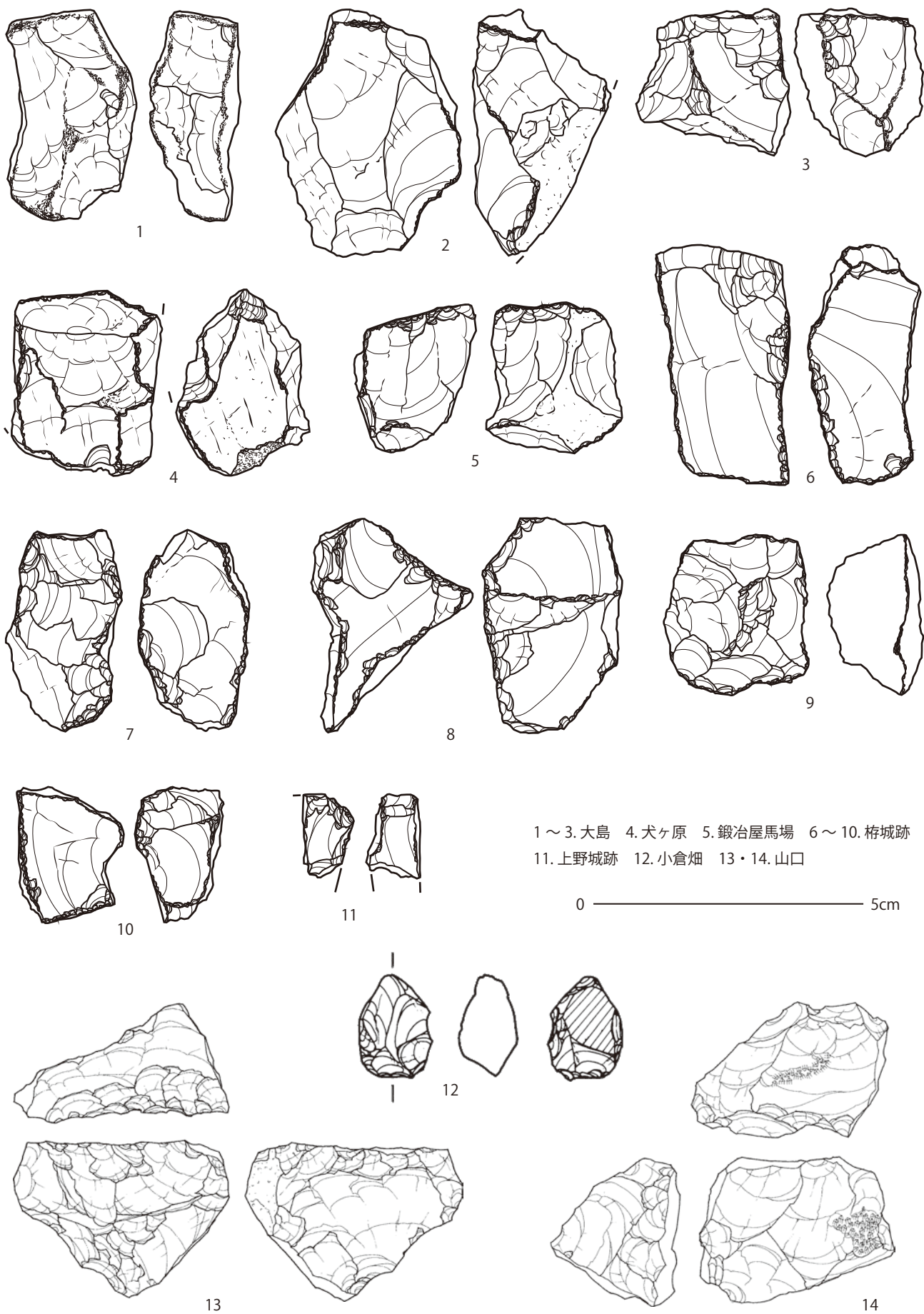
梅城跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010d）では、発掘調査報告書で鉄石英製の“石核”と分類されたものは「火打ち石の蓋然性が高い」とされた。実見の結果、同書掲載の候補品はすべて縄文時代等の石核であったが、未掲載の鉄石英製石器の中から少なくとも5点の火打石が見出された（第1・3図6～10）。第1・3図6は石核状のもので、左縁は粗質であり、摩滅なのか自然な丸みなのか判然としない。右面は全周にわたって稜線が顕著に潰れる。4.4×2.5×2.1 cm・24.7g。第1図7は石核状のもので、稜線は全体に顕著に潰れ、左縁・右面全周の稜線は丸みを帯びる。3.7×2.1×2.1 cm・18.8g。第1・3図8は歪な形状で、各面の稜線上に顕著な潰れが残されている。4.0×3.0×2.6 cm・26.5g。第1・3図9は石核状のもので、正面中央・右～下縁の稜線が顕著に潰れ、特に右縁の稜線は丸く摩滅する。2.9×2.7×1.8 cm・15.9g。第1図10は石核状のもので、稜線の全体にわたって良く潰れ、やや丸みを帯びている。他の鉄石英よりやや朱色味を帯びる。2.5×1.9×1.6 cm・8.9g。火打石の年代については明確にしないものの、注記から出土位置を読み取れる第1・3図8・9がⅡ層（古代から中世の包含層）、第1図7が表土からそれぞれ出土している。

（5）上野城跡の火打石

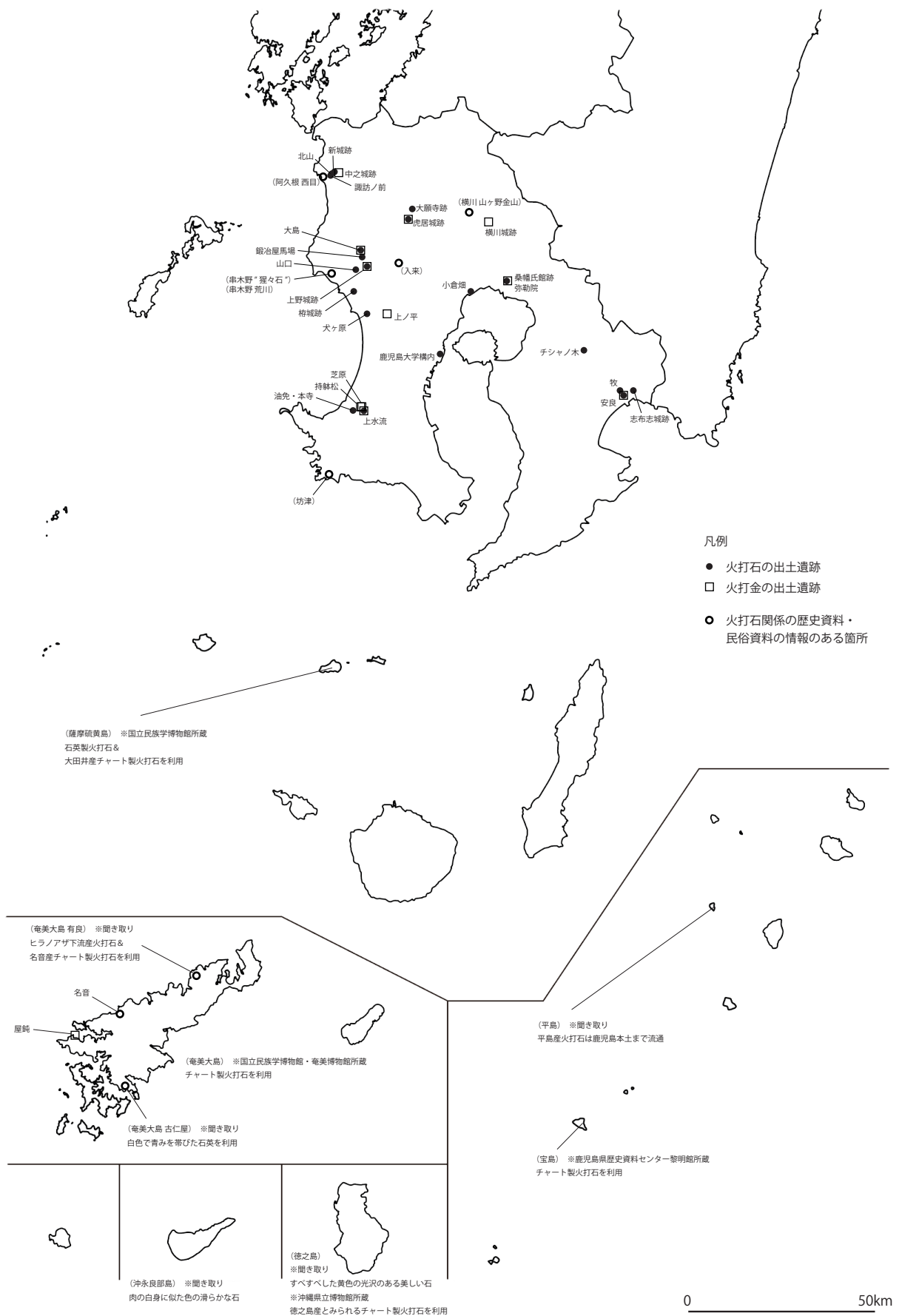
上野城跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2004A）では、B-7区の柱穴P881から乳白色半透明の玉髓製火打石の欠片1点が出土した（第1・3図11）。稜線の潰れが顕著なものである。1.6×1.0×1.0 cm・1.6g。上野城跡の火打石の年代については明確にしないものの、現時点で知られている同質石材の火打石は、いずれも近世以降のものである。なお、上野城跡からは、13世紀前半の遺構出土品1点そして包含層出土で近世以降である可能性が高い1点の計2点の火打金も出土している。

（6）小倉畑遺跡の火打石

小倉畑遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002A）では、加治木町蔵王岳で産する珪質頁岩製という火打石1点が報告されていたが（原報告第53図561）、実見したところ、火打石としての使用痕はなく、先史時代の石核と推定される資料であった。一方で、「周縁に急角度の二次加工が施された小型石器」とされたチャート製石器（原報告第53図562）は、「二次加工」の一部が火打石として使用された際に生じた小剥離・潰れ等（註3）に相当することから、火打石であると認定された（第1・3図12）。なお、本資料は、トレンチ38のⅡ層出土である。Ⅱ層は、現代の水田の盤に相当することから、火打石の年代の絞り込みは難しい。



第1図 薩摩・大隅地域における火打石の新資料



第2図 薩摩・大隅・奄美地域における火打石・火打金の出土遺跡と関連情報



第3図 薩摩・大隅地域における主な火打石

カッコ内の数字は、今回の第1図中のNoならびに原報告の掲載No

(7) 山口遺跡の火打石

山口遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2013）では、1点の石核（原報告第76図362）について「中世以降の火打石の可能性」があると発掘調査報告書で指摘されていたが、火打石としての使用痕がないことから、石核で良いと判断された。一方で、これを含む縄文時代後期から晩期と報告された石核について火打石が含まれていないか検索したところ、石英製の2点（原報告第75図361・第76図363）について、火打石として使用された際に生じた小剥離・潰れ等（註4）があることから、火打石として新たに認定された（第1・3図13・14）。2点とも古代から中世の包含層であるⅡb層から出土しており、火打石の年代もその中に収まるであろう。

4 薩摩・大隅地域における火打石の登場と石材について

(1) 薩摩・大隅地域最古の火打石

これまでの研究により、おおよそ東北から九州本土域において遅くとも8世紀には火打石・火打金のセットによる発火具とその方法が登場していること、鹿児島県域における古代の発火具の唯一例が大島遺跡出土の8～9世紀の火打金であることが把握されている（藤木2025）。こういった研究の到達点からは、火打金とセットとなる古代段階の火打石が薩摩・大隅地域でも発見されることが期待されていた。

これを考える際に、まず、古墳時代の火打石として報告された向井原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010a）・上苑A遺跡（志布志市教育委員会2021）の是非が大きな問題となる。今回、実見したところ、向井原例の「水晶製火打石」は、水晶の六角柱の結晶体の上下が欠け、その断口の全体が水磨されたように丸くなっているもので、火打石ではないと判断された。上苑A例のチャート製石器もまた火打石としての使用痕がないものであった。す

なわち、古墳時代の火打石として報告された資料は2例とも火打石ではなく、現時点では古墳時代の火打石はないと結論付けられる。

したがって、今回報告の大島遺跡・犬ヶ原遺跡・鍛冶屋馬場遺跡の事例は、これまで鹿児島県で未確認であった古代にさかのぼる火打石としてたいへん注目される。この3遺跡5点とも石英製である点は、少なくとも薩摩地域の古代の火打石石材の嗜好を示す可能性がある。

また、大島遺跡は、現状で薩摩・大隅地域で最も早く火打石・火打金を採用した集落となる。同遺跡は、薩摩国府や国分寺と関連の深い人々が居住した集落と発掘調査報告書中で位置づけられており、火打石等の登場の背景の1つに、こういった遺跡の性格が関係した可能性もあろう。今後の調査等により、最古段階の火打石・火打金を出土する遺跡等について国府等の公的施設に関係するような範囲までなのか、あるいは一般集落まで浸透したのかといった、火打石・火打金等を用いた打撃式発火法の普及の度合いへも目を向けていく必要がある。

(2) 火打石の石材について

薩摩・大隅地域でこれまでに確認された火打石の石材（カッコ内にはその石材製火打石のおもな出土遺跡を挙げている）は、おもに石英（大島・鍛冶屋馬場・犬ヶ原・虎居城跡・安良・上水流・山口・大願寺跡・鹿児島大学構内・牧・志布志城跡）、鉄石英（虎居城跡・梶城跡・山口・北山・志布志城跡）、玉髓（上野城跡・チシャノ木・弥勒院・鹿児島大学構内）、碧玉（油免・本寺）、チャート（小倉畑・虎居城跡・安良・新城跡・諏訪ノ前・北山・鹿児島大学構内・志布志城跡）、特定石材名の難しい各種の珪質石材（安良・北山・志布志城跡）である（第3図）（註5）。

石英は、薩摩・大隅地域ともに広く用いられ、古代から近世まで時代的にも偏りなく採用されている。石英の石質には、水晶に近い良質のものから夾雑物・晶洞のあるもの、色調も白色を基本に透光性の有無、桃色や黄色がかかるものまであって、実に多様である。鉄石英は、赤色を基本に褐色ほか別の色味が混じることもあるもので、薩摩地域の中世段階において確実に用いられている。梶城跡・山口遺跡のように、縄文時代等の石器にも同石材が用いられていて両者が混在して出土した場合、先史時代の石核や二次加工ある石器等と古代以降の火打石との分別に注意を要する。チャートは、鹿児島大学構内遺跡出土品に大田井産（現在の徳島県阿南市）があるほかは、産地特定が十分でない。そのような中、阿久根市域の新城跡・諏訪ノ前遺跡・北山遺跡において、黒色、あるいは灰黒色に黒縞の入るチャートが特徴的に用いられており、諏訪ノ前遺跡の発掘調査報告書では近隣の五色浜産の可能性が指摘されている。玉髓は、おもに乳白色半透明のもので、チシャノ木遺跡・弥勒院遺跡・鹿児島大学構内遺跡の状況から、近世以降に用いられているとわかる。宮崎県域においても、同質の玉髓が

近世以降の火打石石材によく選択されている（藤木 2025 ほか）。

以上をまとめると、現時点の資料からみた薩摩・大隅地域における火打石石材の変遷は、古代から石英が広く長く採用され、中世段階の薩摩地域には鉄石英が、近世以降に玉髓が加わると整理される。この変遷観は、あくまで目立つ石材による大掴みであり、今後の資料蓄積による補強・再検証が必須である。

(3) 歴史資料・民俗資料にみる火打石産地

薩摩・大隅地域の火打石石材は、多様な石材環境を背景にカラフルで美しい一方で、その産地特定のハードルは高い。遺跡出土火打石の産地の解明は、直接採取なのか商業的採掘・採取なのかといった当時の経済史的側面にもアプローチ可能であり、今後の課題である。そこで、将来の調査・研究の備え、歴史資料・民俗資料に登場する火打石産地について次のとおり挙げておこう。

江戸時代以降の古文獻に登場する火打石産地を列記すると、薩摩藩が編纂した「三国名勝図絵」（五代・橋口 1843）には、①出水郡阿久根（現阿久根市）の「物産 土石類」に「燧石 西目の内、小湯に出づ」（燧石＝火打石、以下に同じ）、②薩摩郡入来（現薩摩川内市入来町）の「物産 土石類」に「燧石」、③日置郡串木野（現いちき串木野市）の「物産 土石類」に「猩々石 燧石の上品なり」が登場する。明治時代の第二回内国勧業博覧会には、④「品名 燧石 珪石 産地 薩摩国日置郡荒川村 出品者 別府源兵衛」（現いちき串木野市荒川）、⑤「品名 燧石 産地 川辺郡久志村 出品者 岡元弥四」（現南さつま市坊津）とある（明治文獻資料刊行会 1975a, b, c）。『薩隅日地理纂考』によると、⑥横川村の「物産 金石」として「金、滑石、道観石、禹余粮石、火燧石、石中黄、以上六品金山ニ産ス」（火燧石＝火打石）という（鹿児島県教育会 1898）。これと関連しそうな記事が「島津斉彬文書」（島津斉彬文書刊行会 1959）にいくつかあり、1849 年（嘉永 2 年）当時に「大隅横川村山ヶ野金鉱」（山ヶ野金山）から“火の出もよろし”い火打石が産出したという。

このほか、⑦「カドという石は平島に産する。昔はこの石を鹿児島に送っていた」（下野 1966）と 1964（昭和 39）年夏に日高栄熊氏から下野敏見氏が聞き取っている。「カド」は火打石を指す民俗的用語であり、平島（十島村）に産した火打石が鹿児島本土まで送られていたとわかる（第2図）（註6）。

①は、阿久根市西目の海岸に散見されるチャート転礫が火打石の候補となる。③の「猩々石」は「わずかに黒味を帯びた深紅色の石」を意味すると推測され、現時点の出土品との対応からは鉄石英が有力候補となる。④の珪石は白色系の石材が想起される。⑦からは、近隣に産するもののみでなく地域内外から火打石がもたらされることを示している。

こういった歴史資料・民俗資料に登場する火打石産地の情報に加え、先史時代の石器石材の産地に関する知見（宮田 1994・2002・2023, 黒川 2014・指宿市教育委員会 2013 ほか）から火打石の産地を探る試みも重要であろう。

5 おわりに

本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告し、薩摩・大隅地域において、大島遺跡の火打石が現状で最古の火打石であること、同地域において石英・鉄石英・玉髄・碧玉・チャート・その他の珪質石材等が火打石石材となり、古代から近世に至るまで広く石英が用いられたこと、薩摩地域では中世等において鉄石英が多く用いられたこと、近世以降には玉髄が用いられた点を示した。残された課題は多いものの、本稿が、火打石という考古資料への認識と関心の高まりにつながり、今後の調査研究の一助となれば幸いである。

本稿の資料をまとめるにあたり、上床真・川口雅之・黒川忠広・相美伊久雄・寒川朋枝・重久淳一・新里貴之・関明恵・堂込秀人・富田逸郎・長野眞一・中村直子・東和幸・馬籠亮道・眞邊彩・宮田栄二・渡辺芳郎（五十音順）の各氏に資料調査や文献収集、意見交換等においてお世話になった。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。

註1 未掲載資料の検索は、調査年の古い方から第80集の大島遺跡まで、「一般 SA」コンテナ等を対象として進めることができ（第81集以降は未検索である）、鍛冶屋馬場遺跡・犬ヶ原遺跡・上野城跡・大島遺跡の新資料はその成果である。また、発掘調査報告書で火打石として掲載、あるいは石核と報告するけれどもその中には火打石が含まれるかもしれないと記載された遺跡について資料検索しており、杵城跡・小倉畑遺跡・山口遺跡の新資料がその成果となる。

註2 ここに挙げた発掘調査報告書には、実見の結果、火打石でなかったというものも含め、火打石あるいはその可能性があるとしてされた石器を報告したものを挙げている。また、第2図では、未実見の遺跡（高城跡）や火打石・火打金の全てがそれと異なっていたという遺跡は省くこととし、筆者が実見して火打石・火打金であると確認できた遺跡のみドットを落としている。なお、縄文時代等の先史時代の石器と石材が共通し、それらが混在して出土した場合等、火打石かそうでないのか判断に迷う事例もあって、火打石とそれ以外の石器とをいかにして分別するかが課題となる（見分け方のポイントは藤木 2025 等に示されている）。これを完全クリアするためには、該当遺跡やその周辺遺跡等から出土した石器全体の検索や出土状況の再検討を経て初めて達成に近づくものであり、十分な議論等を経たうえでの将来の課題とし

たい。

註3 掲載した実測図は、潰れの表現が十分ではないものの、発掘調査報告書からそのまま転載した。

註4 註3に同じ。

註5 志布志城跡については、発掘調査報告書へ未掲載の火打石があることを相美伊久雄氏よりご教示いただき、実見した。その報告は別の機会に進めたい。

註6 第2図のうち、徳之島で収集された火打石の情報は藤木・大堀・山崎 2025 による。それ以外の民俗資料からの情報とその原典は、藤木 2019・2025 に挙げている。

【引用・参考文献】

- 阿久根市教育委員会 2003『中之城跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 有明町教育委員会 2005『牧遺跡（第1・2次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
- 指宿市教育委員会 2013『水迫遺跡4・西多羅ヶ迫遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
- 上床 真 2009「鹿児島県内出土の火打金・火打石」『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）、203-206頁
- 鹿児島県教育会 1898『薩隅日地理纂考』（鹿児島県地方史学会 校訂 1971『薩隅日地理纂考』）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002a『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（34）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002b『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『犬ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004a『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004b『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『関山遺跡 鳥居川遺跡 チシャノ木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009a『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009b『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（143）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010a『尾付野山遺跡・向井原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（147）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010b『油免・本寺遺跡』
 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (148)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010c『上水流遺跡4』
 縄文時代前期末から中期前半・補遺編, 第Ⅱ分冊, 鹿
 児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (150)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010d『柊城跡』鹿児島
 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (155)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011a『二渡船渡ノ上遺
 跡・山崎野町遺跡A』鹿児島県立埋蔵文化財センター
 発掘調査報告書 (161)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011b『虎居城跡』鹿児
 島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (162)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『芝原遺跡3』鹿
 児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (170)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『山口遺跡』鹿児
 島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (179)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2024『光台寺跡・照信
 院跡・大願寺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘
 調査報告書 (225)
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2010『鹿児島大学構内遺
 跡 郡元団地 D-7・8 区 郡元団地 D・E-5 区 郡元団地
 C-4~6 区 郡元団地 C-6 区』鹿児島大学埋蔵文化財調
 査室調査報告書第5集
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2015『鹿児島大学
 埋蔵文化財調査センター年報29』
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2020『鹿児島大学
 構内遺跡』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報
 告書第16集
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2025『鹿大構内遺
 跡-2013-1 発掘調査の報告1』鹿児島大学埋蔵文化財
 調査センター調査報告書第21集
 川口雅之 2008「鹿児島県における古代・中世鉄器の基
 礎的研究」『地域・文化の考古学-下條信行先生退任記
 念論文集-』, 637-654 頁
 黒川忠広 2014「石器石材としての大川原産珪質岩」『縄
 文の森から』第7号, 1-7 頁, 鹿児島県立埋蔵文化財
 センター
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2020『安良遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振
 興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (34)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2025a『新城跡』公益財団法人鹿児島県文化振興
 財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (59)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2025b『諏訪ノ前遺跡』公益財団法人鹿児島県文
 化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
 (60)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン

ター 2025c『北山遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化
 振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (61)
 五代秀堯・橋口兼柄 1843「三国名勝図会」(五代秀堯・
 橋口兼柄 1966『三国名勝図会』上巻, 南日本出版文化
 協会へ採録)
 志布志市教育委員会 2018『志布志城跡』志布志市埋蔵
 文化財発掘調査報告書 12
 志布志市教育委員会 2021『上苑A遺跡』志布志市埋蔵
 文化財発掘調査報告書 14
 島津斉彬文書刊行会 1959『島津斉彬文書』上巻, 吉川
 弘文館
 下野敏見 1966『吐噶喇列島民俗誌』第1巻, 悪石島・
 平島篇(『トカラ列島民俗誌』として第一書房から1994
 年に再版)
 垂水市教育委員会 2018『高城跡』垂水市埋蔵文化財発
 掘調査報告書 11
 隼人町教育委員会 2003『桑幡氏館跡-第3次調査-』
 藤木聡 2004「九州における火打石・火打金-資料集成
 と基礎的な整理-」『古文化談叢』第51集, 187-200
 頁, 九州古文化研究会
 藤木聡 2011「縄文時代に火打石はあるのか」『南九州縄
 文通信』第21号, 73-78 頁, 南九州縄文研究会
 藤木聡 2019「奄美諸島周辺における火打金・火打石の
 基礎的整理」『中山清美と奄美学-中山清美氏追悼論集
 -』, 435-446 頁, 奄美考古学会
 藤木聡 2025『火打石と火打金の文化史 考古学からみた
 火起こしの研究』吉川弘文館
 藤木聡・大堀皓平・山崎真治 2025「琉球の火打石・火
 打金について-考古・民俗資料の紹介-」『博物館紀要』
 第18号, 29-36 頁, 沖縄県立博物館・美術館
 宮田栄二 1994「鹿児島県における石器の材質」『大河』
 第5号, 2-9 頁, 大河同人
 宮田栄二 2002「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」
 『Stone Sources』No.1, 21-24 頁, 石器原産地研究会
 宮田栄二 2003「火打石と石器石材」『Stone Sources』
 No.2, 巻頭言, 石器原産地研究会
 宮田栄二 2023「鹿児島の石器石材をさがしもとめて-
 地下資源鉱床付近の探索と石材の確認-」『九州旧石
 器』第27号, 橘昌信先生追悼論文集, 235-244 頁, 九
 州旧石器文化研究会
 明治文献資料刊行会 1975a『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 163
 明治文献資料刊行会 1975b『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 171
 明治文献資料刊行会 1975c『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 184
 横川町教育委員会 1987『横川城跡』横川町埋蔵文化財
 発掘調査報告書 (1)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第18号

発行年月 **2025年10月**

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 18 CONTENTS

Introduction of excavated materials at the Hoshizako site,
Kajiki-cho, Aira City (2)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

The Suruga Bay-type pottery fragments excavated from
the Komaki site in Kanoya City

Kitazono Kazuyo

T Consideration about medieval toilet remains
in Kagoshima Prefecture

Hiramine Hiroto

The emergence and materials for flint
in Satsuma and Osumi

Fujiki Satoshi

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
6nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2025

研究紀要・年報

縄文の森から

第
18
号

二〇二五

鹿児島県立埋蔵文化財センター